

「国東市の未来像」 松岡勇樹

討議資料

国東市のランドデザイン

～高福祉都市の構想～



少子高齢化（問題提起）

今から 16 年前、4 町が合併して国東市が誕生した時の人口は約 35000 人、そして現在 2022 年時点の人口は約 26000 人。たった 16 年のあいだに 9000 人が減少し当時の四分の三になりました。そして試算によればさらに 20 年後の国東市の人口は 15000 人を割り込むだろうと予測されています。しかも人口の半分は 65 歳以上。75 歳以上はじつに全体の 4 割近くに達します。こうなると税収の低下や医療福祉の負担増から自治体の財政維持そのものが困難になります。すべての行政サービスが縮小するのはもちろんのこと、このまま進めば国東市の存続自体が不可能になるでしょう。

「少子高齢化」の問題は私たちが暮らす国東半島に限らずこの国の共通した課題です。この国の人口も 40 年後は 9 千万人を割り込み高齢化率は 4 割を超えます。人口減少社会です。国全体としての経済発展はありません。長い坂道を下っていく右肩下がりの社会です。これはこの国にとって避け難い未来です。私たちはこれまでの既成概念を捨てて未来に向けて大きく舵を切らなければなりません。

少子高齢化するこの国の中でそれぞれの地域はこの問題に対する解を模索していますが、どの地域もいまだにその糸口さへ見出せずにあります。仮にどこか特定の地域の人口が増えたなら、他の地域は減少を加速することになります。このことはとても重要な問題です。それを踏まえた上でこれからの地域の未来を考える必要があります。それぞれの地域の特性、資源を活用してどのような未来社会が描けるのか、今こそそれが問われている時なのです。

国東固有の資源（リソース／道具立て）

では国東市のもつ特性、資源とはなんでしょう。

大分県内の他の自治体が持つておらず、国東市だけがもっているものがあります。それは大分空港です。東京・大阪・名古屋などの大都市圏に県内で一番近い場所がこの国東なのです。1971 年に国東半島に大分空港が開港し、空の窓口となって 40 年。県は大手製造業を誘致し、それに伴い関連企業が進出してきました。国東市民が受けた恩恵も少なくありません。しかしながら国東市はこの貴重なインフラを積極的に活用しようとはしてきませんでした。あつたとしてもそれが経済的に成功したとは言えません。ほとんどの場合、国東はただ通過点として空港利用者が通り過ぎるのを見守るだけでした。

空港という交通インフラのアドバンテージを活かすことがまず一つめの課題です。



そしてもう一つ、国東市の最大の資源は国東半島の文化そのものです。

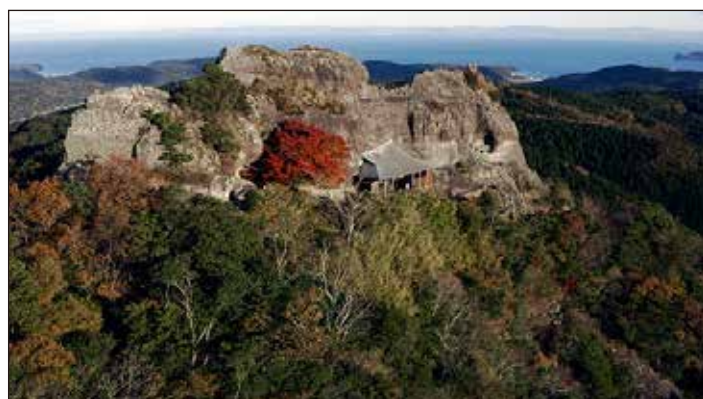
奈良時代から平安時代にかけて国東半島では神仏習合の仏教文化が形成されましたが、国東の山々はそれ以前から山岳信仰をはじめとする精神文化の中心地でした。なぜ国東半島だったのか、その理由は分かっていません。おそらく国東半島の地勢そのものがある種の磁場のようなものを持っているのかも知れません。いまでも半島内に残る数々の石造物や古いお祭りのなかに当時の信仰の痕跡が残ります。

2014年の秋、国東半島芸術祭が行われました。その前後にたくさんのアーティストや学者がこの半島を訪れました。彼らが国東の印象として異口同音に語るのは、国東半島では「あの世（死）とこの世（生）の境界が日々の生活のすぐそばに感じられる」ということです。

私たち、国東半島に実際に生活するものとしてあたりまえのように感じている空気が彼らによるとこのような表現として語られます。これは外部から見た国東の印象を代表するものであるでしょう。そして生活者である私たち自身も日常生活からほんの少し視点をずらしてみれば、同じような幻視を垣間見ることができるはずです。

私たちはあらためて国東半島のもっとも古い地層に接続して、そこから私たちの未来に繋がる価値を見出していかなければなりません。

空港という交通インフラと古代から連綿と続く国東半島文化、この二つの大きな資源を活用して実際にどのような国東市の未来が描けるか、見ていきましょう。



終の住処（提案／ついのすみか）

この国は世界に先駆けて超高齢化社会に突入しました。40年後は日本の総人口の4割が65歳以上になるという予測です。

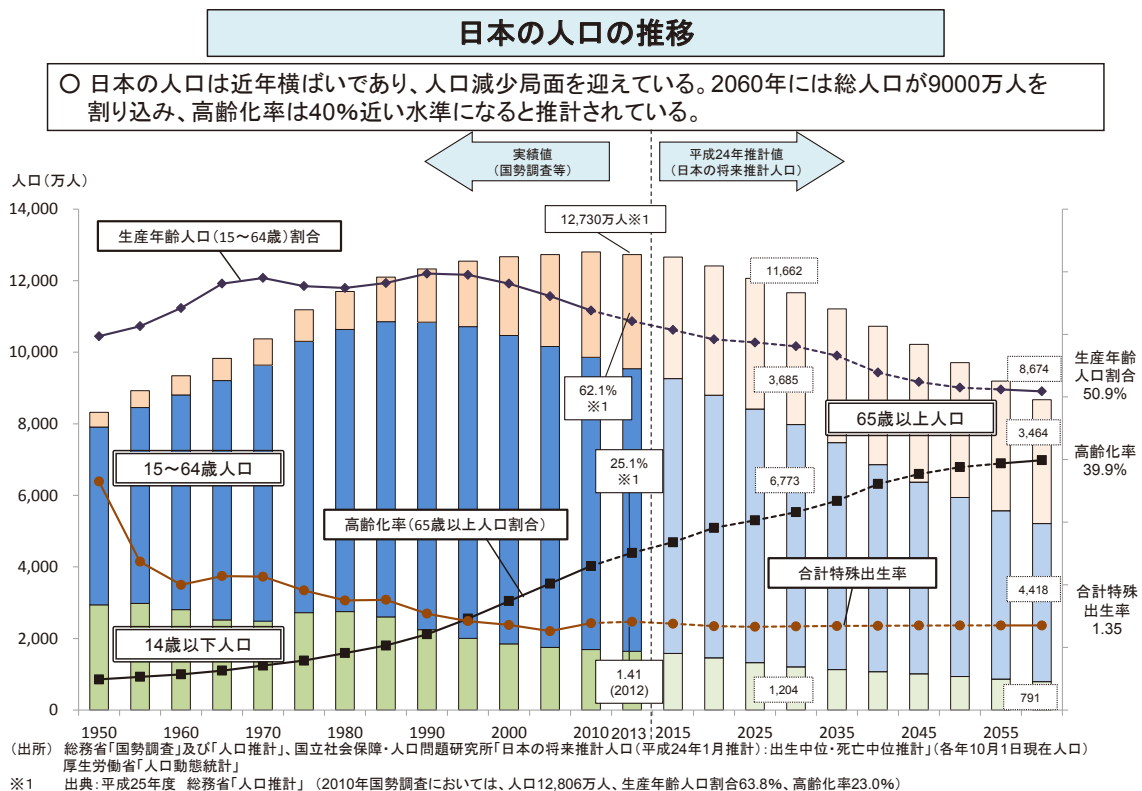
「終（つい）の住処」の問題はこうした背景から生まれてきました。終の住処とはすなわち死に場所のことです。そしてそこで自分はどのように死にたいのか、さらには死んでから自分が何処に眠るのか、つまりお墓の問題に繋がります。

すでに都市部ではお墓問題は深刻な状況にあります。その昔、お墓は村落が共同管理していました。近代以降、お墓は家制度の中で管理されることになります。そして現在、共同体も家も解体されていく過程で従来の墓を守っていくこと自体が困難になってきました。自分がいなくなったら誰が先祖の墓を守るのか、そして自分の墓はだれが守ってくれるのかという不安は現代人の誰もが抱える問題です。とはいえ子供たちに面倒をかけたくない。まして今後単身世帯がますます増えていく現状でこの問題はいまだに出口が見つかりません。

お墓問題は私たちの生活様式に直結した私たち自身の「生」の問題であり、社会構造の問題なのです。良くも悪くも宗教からの縛りが希薄なこの国に住む私たちであるからこそ、超高齢化社会の入り口でさっそく対面しなければならない問題になってきたのです。

国東地域はこの社会問題に対して一つの解を提供することができます。

私が三年前に提案した「時間の庭プロジェクト」は国東半島に国内最大規模の樹木葬による庭園型墓地进行を計画するものです。そして世界で初めて「死」をテーマに据えた高福祉都市の計画をこの国東半島において構想するものです。プロジェクトの概略は次のようなものです。





「時間の庭プロジェクト」

この墓地はこれまで人が森を切り開いてできた、造成された土地のうえに建設されます。かつての用途として採算があわなくなった土地はこの国にたくさん放置されています。これは戦後の高度資本主義社会が残した負の遺産です。私たちはそこに故人の遺灰を埋葬します。遺灰は土中の微生物が分解し、植物の栄養となって自然のなかで循環します。故人が埋葬された場所にいわゆる墓標はありません。そこには生前に故人が好きだった樹木や草花が植えられます。そして遺族には埋葬地点の緯度と経度が記されたプレートが渡されます。その場所は GPS によって正確に記録され故人の情報とともにサーバー上で管理されます。お墓参りに公園を訪れる人たちはスマートフォンなどを使ってその場所まで誘導されます。地上には樹々が繁り、草花が咲く風景が広がります。園内には式典用のホールがあり、レストランがあり、ゲストハウスがあります。

そしてこの庭園墓地は数百年後にはふたたび森に帰って行きます。

お墓の大きさも生前の権威もここではいっさい関係ありません。祈りの場であり、鎮魂の場としての庭園墓地。これは国東半島でしかできないことかもしれません。そして此処に入るのは新たな死者だけではありません。いま全国で「墓じまい」（維持できなくなった墓を更地に戻し遺骨を別の場所に移す）がなされつつある、かつて他の場所に葬られたお骨を受け入れ供養します。2018年時点の墓じまいの数は全国で11万件を超えており、さらに増大傾向にあります。従来のお墓の形態が現在の社会構造に合わなくなっているということです。

どんな人もどんな宗教も、そして無縁者もすべてを受け入れ、死者たちを等しく見守るシステムを構築します。

庭の写真はビエト・オウドルフの作品から引用



交流人口の増加 (step1)

この施設を利用するのはもちろん地元の人たちだけではありません。県内はもとより大都市圏からの入園希望者が多数を占めます。契約者の遺灰はこの庭園墓地に運ばれ埋葬され弔われます。希望者には決まった日に墓前でお祈り（お経）が捧げられます。また年に何度か墓地合同供養が行われます。遺族はその様子を遠隔地からリモートで見守ることができます。

ある契約者の遺族たちは空港を利用して命日にお墓参りに訪れます。午前中は季節の花が咲く庭園をゆっくり散歩してから園内のレストランで会食（法事）をします。市内のホテルに一泊して次の日は朝から国東半島の寺院や旧跡をめぐる。そして夕方、帰りの飛行機の中で考えます、自分も死んだらこの国東半島の地に眠りたいと。大都市圏と国東市の間の交流人口が年々増加してゆきます。



移住者と経済 (step2)

ある契約者夫婦は自分たちがお互いの死を看取る場所としてこの国東半島を終の住処にすることを決め移住します。いずれ自分たちが永眠することになる土地と風景を身近に眺めながら穏やかに死を迎えたいからです。彼らは古民家を買取りリフォームし、お互いに身体が動かなくなるまでは、と思ひ定めそこで暮らし始めます。そのようして高齢の移住者が増えてゆきます。

介護・福祉施設や終末期医療の需要が急速に高まります。国東市民病院を中核として市内の地元事業者を中心にした医療・福祉のネットワークが強化されます。新たな事業者の進出・誘致もあるでしょう。それとともにさまざまな「死」に関連する問題が大学や各種研究機関を交えて総合的に研究されるようになります。医療、科学、哲学、宗教、心理学など分野を横断した研究です。そうして国東市において「死」を中心テーマとした産学官共同のチームが発足し、国東市は国内初の医療福祉行政特区となります。

介護福祉施設の拡大はもちろん、介護関連製品・設備・住宅、介護ロボット、関連ソフトウェアの開発事業者、終末医療の研究機関、介護福祉人材の育成機関などが次々と国東に集まってきます。ITや製造業を含めた介護福祉関連事業のコンプレックスです。

関連事業に携わる若い人材が国東市に増えてゆきます。専門の教育機関も誕生し、そこに学ぶ学生も市内に暮らすようになるでしょう。

仕事が増え、街に活気が戻ってくるのと同時に自治体の税収が上がります。それをどこに使うのか。子どもたちのために使うのです。

教育について (step3)

自分の子どもたちをあらゆる権威、圧力、偏見から守ることが私たち大人の第一の使命です。そして子どもたちこそがこの国の未来にとって、私たちの住む地域社会の未来にとって最大の資源なのです。

学校教育は子どもたちが幸せになる方法を自ら学ぶ場であるはずで。そこでは子ども同士の競争という概念はいっさい必要ありません。

私たちが参照すべきひとつの教育のかたちがあります。フィンランド型教育といわれるものです。たとえば日本では教科単元ごとに正解とされるものが決まっていて、それを導き出すこと、あるいはその答えを覚えることが教育指針とされています。いっぽうフィンランド型教育では生徒が疑問に思ったことについて生徒自ら情報収集し、解決のための意見を発表し、議論します。しかもそれは単一の科目だけでなく、複数の教科を横断して行われます(クロスカリキュラム)。教師はその手助けをするのが役目です。教室を出て国東の自然や里山の中で学ぶこともあるでしょう。地元の人たちに授業の協力をお願いすることもあるでしょう。そうして子どもたちはそれぞれに興味を持った分野を深く掘り下げてゆきます。点数を取るために学ぶのではなく、自らが幸せに生きるため、そしてこの世界で生き残るための学習です。

授業に関する教師の裁量も大きくなります。教師が自ら教科書を選び授業を組み立てます。授業時間も短く、教師の労働時間は減少し、子どもたち一人ひとりに向かう時間は増大します。統一テストは完全に廃止し、生徒が宿題に要する時間も最低限度とします。すべては子どもたちを守るためです。当然、教師自身が学ぶことも多くなるでしょう。教師の権限が拡大される代わりに教師の能力のさらなる向上が求められることになります。結果として教師たちはかつての「威厳」を回復するでしょう。「先生」のようにになりたいと思う子どもが増えていくことでしょう。またそうでなければ、学ぶ人=教える人の関係は持続していかないのです。私たちはオリジナルの**国東型教育**のかたちをつくりましょう。

未来学校としての国東高校 (step4)

もちろんこれは一朝一夕になるものではありません。しかしこの国東市で全国に先駆けてこれを始めることは可能です。

国東市では一昨年、小中9年間一貫教育の「志成学園」が誕生しました。私たち国東市民にとっては僥倖です。この学校を起点にして、いま子どもたちに最も必要な学びの場を私たちの手で作り始めましょう。それを国東市内の全小中学校に広げてゆきましょう。そして国東市内の中学校から無試験で国東高校に入学できる新たな仕組みをつくりましょう。入学試験を完全に無くすことで子どもたちの貴重な学びの時間を守ると同時に、学ぶことに対するストレスを大幅に取り除くことができるはずで。す。「6・3・3年制」子どもたちのために**12年間の自由で濃密な「学びの場」**をつくりましょう。不要な競争を取り除くことは子どもたちにとってとても大事なことなのです。

現在の大分県立国東高等学校は従来からの普通科に加えて各種専門学科が併設されています。教育の多様性は生きるための学びの場をつくる時に大きなアドバンテージになり得ます。内外から特別講師を招聘しましょう。県外からも学生を募集しましょう。国東半島の自然と伝統文化の中で子どもたち主体の自由な学びの場をつくりましょう。国東市には**大分空港**があります。大都市圏からの国内留学を推進してゆきましょう。学生寮も作りましょう。地元住民による里親制度の仕組みも考えましょう。子どもたちは私たちが生きる社会の可能性そのものです。子どもたちを国東半島の地で守り育てましょう。

「今いる人、もういない人、まだいない人」

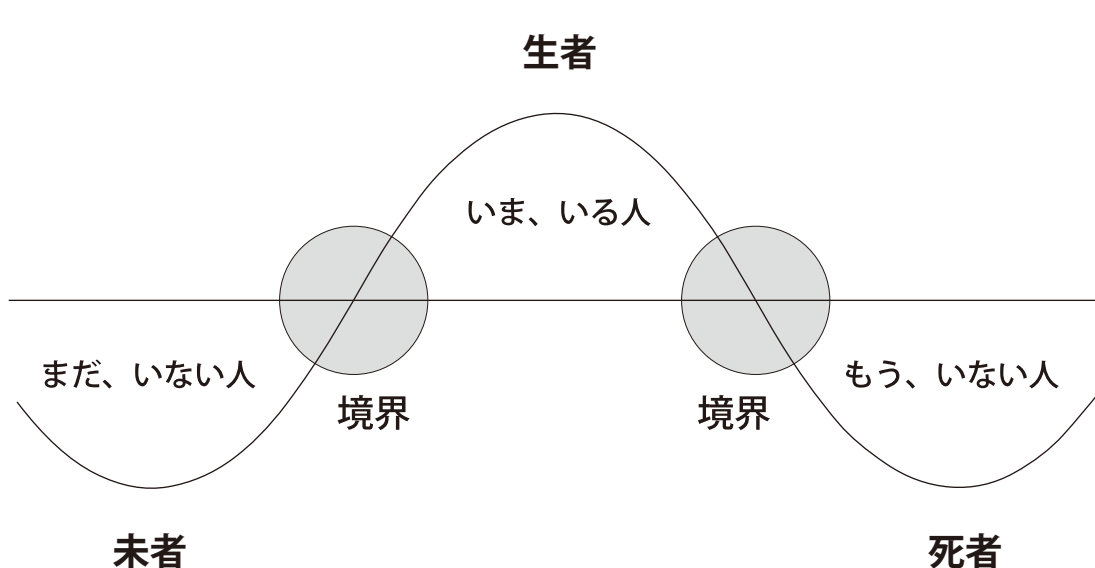
いまこの場所に流れている「時間」は生きている私たちだけのものではありません。その傍らにはすでに逝きこの地に眠る人、そしてこれからこの地に生まれ出ようとする人がいます。つまり「今いる人、もういない人、まだいない人」にとって同時的に時間は流れています。(図1)

もっとも重要なのは二つの境界部分、つまり「死」と「生」のポイントです。この二つの境界の周縁に私たちの持てる資源を集中することで、今生きている私たちの世界がとても豊かに結実していくのです。

これまで見てきたように、現代社会の「死」の問題を積極的に取り扱うこと。その解の一つとしての庭園墓地「時間の庭」、介護福祉・医療関連事業の促進、そこで生み出す利益をこれから生まれてくる子どもたちの「生」に還流すること。古今東西すべての社会集団において「死」の取り扱いはその社会を規定する最も重要な事柄でした。ところが現代社会ではそれがうまくいっていません。今この時点でそれができる地域はとても限られています。国東市は最も大きな可能性を持った地域の一つです。循環する自然の中で私たちの「死」を丁寧に扱うこと、安心して眠れる場所を確保することが、必ず「生」を賦活するはずで

超高齢化問題の帰結は今後大量生産される「死」を社会としてどのように取り扱えばよいかということ。 「死に至る時間」をどのようにデザインしていくか、いかに豊かな時間に変えられるか。

いっぽう「生」のポイントの周縁には子どもたちがいます。これから生まれてくる子どもたち、これから育っていく子どもたちをあらゆる社会の圧力や権威から守りましょう。そして社会の中で死と生を循環させていくのです。



国東市を人口減少局面から反転し、死と生が循環する持続可能な社会にするためには、考えられる限りこの方法しかありません。この益は国東市の周辺地域にも広がるでしょう。隣接する杵築市や豊後高田市と連携することが重要です。1)「死」を国東半島の地に集約する。2) 関連事業の拡大を促す。3) 経済が活性化する。4) その利益を子どもたちに向けること。大事なのはこの手順を踏むことです。

そして行政の基準となるもの、個々の政策の判断基準は、それが本当に「子どもたちのためになるのか、どうか」であるべきです。とても単純なものです。私たちはつねにその場所に立ち返って、妥協することなく議論を続けてゆかなければなりません。それができれば私たちの未来はおのずから開けてくるでしょう。

「私たちは私たちの子どもを守らなければ。」

以上が国東時間のコンセプト。私が構想する国東市のグランドデザインです。

私はこの一連の取り組みを「国東時間プロジェクト」と名づけました。共感していただける方々はぜひ私にご連絡ください。一緒にこのプロジェクトを進めていきましょう。

松岡勇樹 プロフィール

- 1962 大分県国東市安岐町生まれ
- 1990 武蔵野美術大学大学院建築学科修士課程修了
- 1995 段ボール製 組立式マネキン「d-torso」1号試作
- 1998 アキ工作社 設立
- 2001 d-torso『EVE』2001-2002 グッドデザイン賞
- 2005 第二回大分県ビジネスプラングランプリ最優秀賞
- 2007 経済産業省「元気なモノづくり企業 300社」認定
- 2012 経済産業省「ものづくり日本大賞 優秀賞」受賞
- 2013 週休三日の「国東時間」スタート
- 2018 社名を国東時間株式会社に改称
豊後之国府内薪能「時間樹」を制作
- 2019 会社経営に携わるとともに日本文理大学建築学科で
客員教授として「空間デザイン」の講義を行う。

連絡先

〒873-0231

大分県国東市安岐町下原 2406-1

松岡勇樹 (まつおかゆうき)

tel: 090-6421-3712

email: wtv1@mac.com

Site: kunisakitime.com/matsuoka/

